

## 第百七十六話 守備部隊の敢闘が北海道を守った！

あわよくば北海道を軍事占領せんと目論んでいたソ連軍の鋭鋒を食い止めた戦いがある。彼らの敢闘がなかったならば、北海道は敢え無く占領されていたかも知れない。第九十一師団と戦車十一連隊が守備していた占守島に、8月18日0200ソビエト軍が突如として上陸し、日本軍守備部隊と激しい戦いとなった「占守島の戦い」がそれである。

### 1 占守島の戦略的意義と日本軍守備部隊の概要

占守島は、北千島列島のカムチャッカ半島に一番近い島であり、同半島南端にあるソ連軍のペトロパブロフスク海軍基地からは10数キロしか離れていない。夏場には日魯漁業の缶詰工場があった。島中央に四嶺山が位置し、他は穏やかな丘陵地帯である。年中濃霧が発生している。隣の幌筵島との間には、水深が深く、大型船も航行可能な幌筵海峡がある。



この重要な海峡を守るために、満州から転進した第九十一師団（師団長堤不夾貴中将、2個旅団基幹）と戦車十一連隊が配置された。この内、占守島には、南部に4個大隊を集中配備し、北部には遊撃戦任務の1個大隊の計約8,400名が配備されていた。

玉音放送に引き続き、第五方面軍（在北海道樋口季一郎中将 第七話参照）から、「停戦、自衛戦闘は妨げず」との指示を受け、守備隊は武装解除の準備を進めていた。よもやソ連軍が侵攻する可能性はないものと判断していた。但し、警戒のため、沿岸拠点に一個中隊規模の部隊を展開させていた。

### 2 ソ連軍の状況、上陸戦闘

8月9日、日ソ中立条約を一方的に破棄して対日参戦したソ連は、8月15日千島列島北部の占領に関する作戦の準備・実施を第二極東方面軍司令官及び太平洋艦隊司令官に発した。ソ連軍先遣隊は、8月18日午前二時半頃、占守島の上陸適地である竹田浜に上陸を開始した。沿岸配備された日本軍部隊が直ちに反撃したが、午前七時頃には、ソ連軍第一梯団の上陸は完了した。第二梯団は日本軍の砲撃により手間取り、午前十時頃に完了した。上陸部隊の火砲等は輸送船に残されたままだった。

日本軍は、方面軍の命令もあり猛烈な反撃を開始した。反撃部隊は、18日午後にはソ連軍を殲滅できる有利な態勢となった。

昼頃、方面軍から戦闘停止、自衛戦闘移行の命令があり、16時をもって戦闘停止した。ソ連軍が、尚も戦闘を継続するに及び日本軍は後退した。余談ながら、占守島女子工員20名の脱出劇もあった由。

### 3 停戦交渉、停戦

大本営はマ元帥にスターリンへの停戦の働き掛けを依頼するも、スターリンは黙殺した。両軍間に停戦合意が成立、降伏文書に調印したのは、21日21時である。23日には武装解除された。日本軍の戦死者は、戦車連隊長等600名、対してソ連軍は3000名であった。スターリンの命令で、極東ソ連軍は、2個狙撃師団をもって北海道上陸命令を下達し、部隊は船上待機していた。マ元帥が、8月30日に米軍が北海道を占領すると宣言したのを受けて引き返した。

### 4 占守島の敢闘がソ連の侵攻を停滞させ、結果的に、北方領土を除き、北海道の占領を阻止し得たと云っても良からう。因みに北方領土の占領は8月28日から9月1日の間である。スターリンが「樋口（方面軍司令官）と堤の二人の将軍が居なかったら、我々ソ連軍は北海道に侵攻して占領していたであろう。一旦占領してしまえば、米軍が何を言っても問題にならない。北海道を占領さえしていれば、後の日本列島は共産革命で赤化することは容易い。・・・（以下略）」と語ったという。危うかった。

\* 占守島守備部隊の勇戦敢闘に感謝だ。

（第百七十六話 了）